

ウィリアム・メレル・ヴォーリズと近江八幡

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880-1964）は、アメリカ生まれの建築家、実業家、キリスト教宣教師で、その生涯の大半を近江八幡で過ごし、現在も近江八幡に顕著な遺産を残している。建築家として最もよく知られているヴォーリズは日本全国で 1,600 以上の建物を設計したが、近江八幡では、そのコミュニティ精神と公共事業への献身が高く評価されている。

建築家ヴォーリズ

カンザス州レブンワースで生まれたヴォーリズは、1905 年、24 歳で近江八幡にやってきた。滋賀県立商業高校（現在の八幡商業高校）の英語教師として採用されたが、彼の本分はキリスト教の布教に生涯を捧げることであった。しかし、旺盛な布教活動や瞬く間に多くの生徒を集めたバイブルクラスは、異国の宗教の普及を懸念する地元住民の反発を招き、2 年で教師を解任される。

それでもヴォーリズは、布教活動の資金を得るために別の道を歩むことを決意する。アメリカで建築を学んでいたヴォーリズは、1907 年に近江八幡 YMCA の設計を依頼された。この仕事をきっかけに、翌年、ヴォーリズは自分の建築事務所を設立することになる。大学時代から YMCA で活動していたヴォーリズは、日本での人脈も豊富であった。そのおかげで、教会や YMCA の建物、個人住宅などの設計依頼を数多く受けることができた。ヴォーリズの名が建築家として知られるようになってからは学校や病院などの大規模な建築も手がけるようになった。

ヴォーリズの建築は、一見すると西洋風だが、日本の風土や生活様式に合ったものである。そして、使う人のことを第一に考えた設計を心がけていた。そのため、ヴォーリズの設計はすべて、クライアントの要望や好みに合わせて作られた完全なオリジナルである。

ヴォーリズは主に独学で建築を学んだが、西洋の近代建築を日本に紹介することに大きく貢献した。日本では、北は北海道から南は九州まで、また戦前は日本の植民地であった韓国、台湾、中国の一部でも彼の建築を見ることができる。日本では、東京・御茶ノ水の山の上ホテル、大阪・心斎橋の大丸デパート、兵庫・西宮の関西学院大学キャンパスなどが有名である。近江八幡市では、旧八幡郵便局、池田町のコロニアル様式の住宅群、ヴォーリズの終の棲家で現在は彼の生涯と業績を記念する博物館であるヴォーリズ記念館など、ヴォーリズの建築物が特に注目されている。

神の国の建設

建築をこよなく愛したヴォーリズにとって、地上における神の国の建設は、より大きな目標であった。1911 年、宣教活動の母体となる「近江ミッション」を設立し、モーターボートで琵琶湖を横断するな

ど、滋賀県全域でキリスト教の伝道を開始した。1920年、ヴォーリズは活動資金を得るために会社を設立し、YMCAの支援者であり慈善家のアルバート・アレキサンダー・ハイドがアメリカで開発したメンソレータムという軟膏を輸入・販売することに成功した。この商品売るためにヴォーリズが設立した会社は、現在も近江兄弟社という社名で、メンソレータムの類似品である「メンターム」を販売している。

ヴォーリズの使命感には、公共事業への強いコミットメントがあった。近江八幡に教育施設や医療施設を建てるために、妻の満喜子と協力して資金を集めた。彼の気質と、勤勉と儉約を重んじる人間性は、近江八幡の商家の伝統として地元の人々に大切にされてきた理念と合致するものであった。江戸時代に近江八幡で活躍した商人たちのように、ヴォーリズもまた、自分の利益のためだけでなく、取引先のため、社会のために仕事をするを信条としていた。その共通点からか、彼は地元の人々と長い付き合いをすることができた。

ヴォーリズは1941年に帰化し、一柳米来留（ひとつやなぎ・めれる）と名乗るようになった。アメリカからやってきて、日本で一生を終えるという意味で、「米来留」と名付けた。近江八幡は世界の中心であり、神の摂理に導かれた場所だと考えていた。

ヴォーリズのバイブルクラスは当初不信感を持たれていたが、やがて近江八幡への貢献が認められるようになり、1958年、近江八幡市初の名誉市民となった。理想だけを抱いて近江八幡にやってきたヴォーリズは、地域の人々と力を合わせて、建物だけでなく、企業や学校、病院を建設していった。彼が設立した多くの企業や団体は、現在もその活動を続けている。